膀胱縫合術により膀胱破裂から回復した黒毛和種去勢肥育牛の一症例

東播基幹家畜診療所
○菅　保礼　梁瀬　博　柳澤　義人　上田　茂樹
井上　雅介　奥田　紳一郎　白澤　純一

去勢肥育牛における膀胱破裂は尿石症に起因するものがほとんどで，多くは死廃の転帰をとる。また尿毒症により廃棄処分となり経済的被害も大きい。今回我々は膀胱破裂と診断した黒毛和種去勢肥育牛に対し，膀胱縫合術を実施し良好な経過を得たので報告する。

材料及び方法

症例は 2010 年 5 月 13 日生まれの黒毛和種去勢肥育牛で，2011 年 2 月 9 日に体重 239kg で導入された。2 月 24 日尿石症のため S 状曲部を尿道切開し尿道瘻形成するも治癒せず，3 月 4 日には血清 BUN 91mg/dL,Cre 7.3mg/dL となり，排尿なく腹囲膨大。腹腔穿刺による尿の排出によって膀胱破裂と診断し,第 10 病日の 3 月 5 日に膀胱縫合術及び再度尿道瘻形成術を実施した。

術式は，キシラジンにて鎮静後，左側仰臥から右に少し傾けた状態で保定，臍から陰嚢周囲まで大きく剃毛・消毒し，右乳頭の脇を約 15cm 切開した。腹腔内の尿を緩徐に除去し膀胱及び諸臓器の状態を確認後，膀胱先端を約 3cm 切開して下降性に尿道カテーテルを挿入し尿道閉塞状況を確かめた。坐骨弓下部で新たに尿道瘻を形成し，膀胱切開部と膀胱破裂及び損傷部位を縫合したのち閉腹した。術後は 1 週間抗生物質の全身投与を続け，10 日後に抜糸した。

結　果

腹腔内は大量の尿が貯留し、膀胱には頚部左側に約 2cm の破裂孔，右側体部に 2 ヵ所粘膜面を残した筋層断裂を認めた。また左尿管に結石，腎臓周囲の脂肪組織に水腫と鬱血を認めた。閉腹中に排尿が再開され，術後 2 日目には BUN 5mg/dL，Cre 0.9mg/dL となり食欲も発現したが，術後 90 日までに 4 回熱発し，さらに牛舎移動後に 2 度の耳翼下垂を伴う食欲不振となり抗生物質による治療にて回復した。術後 135 日以降に治療はなく，術後 9 ヵ月には胸囲 175cm（推定体重 386kg）となり，血液検査でも安定した数値を示した。術後 10 ヵ月を経過した 2012 年 1 月 25 日現在も飼養中で食欲と排尿は良好である。

考　察

膀胱破裂に至った尿道閉塞牛では，腹膜灌流や膀胱内カテーテル留置によって BUN 改善後に経済的淘汰する方法もあるが，今回は導入直後で経済的淘汰の望めない牛であったため膀胱縫合術を選択した。術後に頻発した熱発は尿路感染症と思われ，長期に渡る食欲と排尿のモニタリングが必要となった。本症例は術後 135 日から術後 10 ヵ月を経過した現在まで,安定した食欲と排尿を維持しており,今回のような肥育ステージの早い段階の牛や,若齢牛の膀胱破裂には膀胱縫合術によって生産復帰が期待できるものと考えられた。